J. R. R.トールキンの戦いとカトリシズム

島　居　佳　江

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第五十八号抜刷

2022（令和４）年３月

J. R. R.トールキンの戦いとカトリシズム

島　居　佳　江

はじめに

J. R. R. Tolkien の主要作品、*The Hobbit*『ホビット』や *The Lord of the Rings*『指輪物語』には、多くの戦いの場面がある。使命を帯びた登場キャラクター[1]が目的のために旅に出て、私欲を捨て命懸けでその使命を成し遂げる。『ホビット』では竜から財宝を取り戻すこと、『指輪物語』では、指輪の破壊が使命である。使命の達成には、仲間の裏切りから敵の攻撃まで多種多様な障害を乗り越える必要があり、そのほとんどが戦いを伴う。手に汗握るスリルと興奮がこれらの作品の魅力を高め、その結果、度々映画化され、ゲーム等他の大衆文化にも多大な影響を与え続けている。しかしながら、トールキン十八番である戦いの場面が、存命中最後に発刊された *Smith of Wootton Major*『星をのんだかじや』には出てこない。それどころか、戦いを真っ向から否定するかじやが主人公である。トールキン作品中の戦いに着目し、それをトールキンのカトリシズムへの揺らぎと関連付けて考察したい。

1　『指輪物語』の戦い

『指輪物語』で、一つの指輪を巡る一連の戦いは指輪戦争と呼ばれ、主な戦いを挙げるだけでも 12 以上になる。『指輪物語』では、Hobbits 4 人、Wizard 1 人、Elf 1 人、Dwarf 1 人、そして人間 2 人の合わせて 9 人が、旅の仲間として指輪の破棄という共通目的を掲げて旅にでる。途中、人間の

Boromir は指輪の魔力に抗いきれず変節し、命を落とす。他の旅の仲間たちも偶発的に離れ離れになり、複数の小グループに分かれるが、その置かれた場所で精一杯の戦いを繰り広げる。ホビットの Frodo は Ring-bearer で、同じくホビットの Sam と共に指輪が造られた Mordor の火の山をひたすら目指すが、彼ら以外は、人間が統治する Rohan と Gondor という二つの国を助けることになる。ローハン国が戦うのは、Battles of the Fords of Isen（アイゼンの浅瀬の合戦）と Battle of the Hornburg（角吹城の合戦）で、敵は Isengard の Saruman である。ゴンドール国は、モルドールの Sauron を相手に Battle of the Pelennor Fields（ペレンノール野の合戦）を戦う。ローハン国の戦いからゴンドール国の戦いへは、味方も敵も戦う規模も全て拡大していく。つまり、ローハンの軍勢はそのままゴンドールの軍勢に加わり、旅の仲間もフロドとサム以外は再集結していく。そして、アイゼンガルドは破れるが、サルマンは生き延び、サルマンの背後にさらに強大なサウロンが現れる。この躍動的な拡張が緊張感を徐々に高める効果をもたらす。指輪破棄に至る戦い群の最終戦争は、Battle at the Black Gate（黒門の戦い）である。指輪所持者の使命を敵の目から逸らすため、ゴンドールやローハン、そして諸侯国の兵からなる西軍は、モルドールとその属国からなる大軍に対して、勝利の見込みのない決戦を挑む。旅の仲間は、フロドたちを遠隔から支え、全ての戦いは指輪所持者フロドとサムの戦いへと収斂していく。そして、バラバラになっていた旅の仲間たちが、最終的にそれぞれ全員で、共通の敵、冥王サウロンに向かって、最善を尽くし、死力を尽くして戦う。全体を見ると、Aragorn を頂点とする「西方世界」対、サウロンを頂点とする「暗黒の国」という図式になる。戦局は、旅の仲間を含むアラゴルン側に圧倒的に不利で、もはやこれまでかと思われたとき、フロドたちが全てを統べる指輪を破棄して任務を全うし、冥王サウロンは指輪と共に消滅した。

指輪破棄を巡る戦争の敵は、圧倒的な悪の力を持つ冥王サウロンとその部下、幽鬼である黒の乗り手、オーク、トロルなどで、読み手の感情移入する余地はほとんど無い。サウロン以外はサウロンに支配、管理されており残虐で、個人の意思などはほとんど表現されない。「Ilúvatar は『指輪物語』の

前史に当たる *The Silmarillion*『シルマリルの物語』の中に登場する唯一神で、創造主でもある。その創造主による被造物は悪によって唆され、籠絡されるまでは本質的に善であるので、トールキンは敗北した敵に対して英雄たちに繰り返し憐れみを施すようにさせる。とはいえ、サウロンの手下に対して赦しは全くない」と、Wood は述べる（149）。そして、冥王サウロンは、ほぼ完全悪として描かれている。サウロンは、『シルマリルの物語』の中で、初めは天使的種族だったが、誘惑されて堕落し、残酷で残忍なこと筆舌に尽くし難い存在と成り果てた。

> Sauron was become now a sorcerer of dreadful power, master of shadows and of phantoms, foul in wisdom, cruel in strength, misshaping what he touched, twisting what he ruled, lord of werewolves; his dominion was torment.（*The Silmarillion* 182）

このような特徴を帯びる敵なので、殺害の対象となる場合、心が痛むことはほぼない。むしろ、殺戮が高揚感、清涼感を与え得る。そのような一場面を見てみよう。

> Fey he seemed, or the battle-fury of his fathers ran like new fire in his vains, and he was borne up on Snowmane like a god of old, even as Oromë the Great in the battle of the Valar when the world was young. His golden shield was uncovered, and lo! it shone like an image of the Sun, and the grass flamed into green about the white feet of his steed....And then all the host of Rohan burst into song, and they sang as they slew, for the joy of battle was on them, and the sound of their singing that was fair and terrible came even to the City.（*The Lord of the Rings* 838）

これは、ペレンノール野の合戦において獰猛な戦士として戦う Éomer（ロー

ハン王 Theoden の甥。両親亡き後、セオデン王に養子として育てられる）の描写である。「古の神の一人」にも見えるエオメルのローハン軍は殺しながら歌う。「戦いの喜びが彼らを襲ったから」である。邪悪な敵を「殺害することは正義の喜びを享受すること」（ウッド 150）になる。

2　戦いを支持するカトリシズム

カトリシズムの礎とも言える、Aurelius　Augustines、Thomas　Aquinas が定義した「just war（正戦）」そして、宗教戦争とも言われる「holy war（聖戦）」の条件を、『指輪物語』のこれらの戦いが満たしていることを検証したい。「ヨーロッパにおける正戦論の思想史は、しばしばキリスト教誕生よりも前の思想家キケロあたりから紹介されるが、アウグスティヌスからおおむね、キリスト教において戦争・暴力を場合によっては是認するという思想が始まったと言われている」(石川 138)。アウグスティヌスは『神の国』の中で、「賢者に正しい戦闘の遂行を強いるのは敵対する側の不正義なのである」(47) と記しており、積極的に戦争をするように呼びかけはしないものの、「あらゆる者の平和は秩序の静けさ」（64）であり、その平和を乱すものに対して戦うことを辞さない。このアウグスティヌスの考えを継承し、発展させたのが 13 世紀のスコラ学者アクィナスである。アクィナスは『神学大全』で戦争問題を扱ったが、その議論は基本的にアウグスティヌスの議論を念頭に、それを拡張する形で展開されている。その中でアクィナスは、ある戦争が正しいものであるための３つの条件を提示している。第１は「君主の権威」である。戦争は私人に属する仕事ではなく、戦争を行う際の全権と決定は君主に属する。第２は「正当な原因」である。攻撃される人たちは、何らかの罪のために攻撃を受けるに値する場合である。そして第３は「正しい意図」である。すなわち、戦争は善を助長し悪を避けるといった意図のもとで遂行されなければならない（80-81）。

ローハン国とゴンドール国の戦いはそれぞれ、アクィナスが『神学大全』

で定義する「正戦」の条件である「正当な原因」、「君主の権威」、「正しい意図」を充たしていると考えられる。なぜならば、ローハン国はアイゼンガルドから、そしてゴンドール国はモルドールからの攻撃という「正当な原因」に対して正当防衛として戦った。ローハン国はセオデンが指揮をとり、ゴンドール国はアラゴルンが率いた。セオデンは正統なローハン王で、建国王の末裔であるアラゴルンはのちに、再統一された王国の Elessar 王となり、西方世界の盟主となる。二人とも「君主の権威」を持ち、両国は、彼らの世界である中つ国に平和と秩序を取り戻そうとする「正しい意図」を持って戦った。ウッドは、トールキンの考える戦争の必然性と限度について説明する。

> Internal evils are to be resisted by spiritual and moral discipline, but external injustices must be halted with force. Not to employ all the might of the Free People in the fight against Sauron is to consent to his evil. Worse still, it is to leave defenseless the “little people” who are ground to bits by the tyrannous forces of history. Tolkien is no pacifist. (93–94)

ウッドは、悪を内的、外的の二種類に定義し、外的な不正行為に対しては武力によって阻止しなければならないとする。サウロンの攻撃は外的な不正行為にあたり、サウロンの攻撃に対して正当防衛を戦うことは、責任ある民を守るためにも義務となる。ウッドはトールキンを不戦主義者ではないと断ずる。

指輪破棄に至る最後の戦争である Battle at the Black Gate（黒門の戦い）もアクィナスが言うところの３つの条件を満たした正戦である。その上、結果的に敵を一掃し、この指輪破棄の戦い群全体は正戦を超え、聖戦の範疇に入ったとも考えられる。石川は聖戦を正戦より積極的な戦争の肯定とみなしている（143）。また、木村は以下のように、正戦と聖戦の違いを説明する。

> ヨーロッパの「正戦論」はキリスト教世界内部における戦争の限界を定

めたルールであり、このルールは異教徒との戦争においては遵守する義務がないからである。したがってヨーロッパ世界内部で異端とされた集団への制裁や、異教世界に対する戦争は「聖戦」となり、特に「戦争における法」が無視される残虐な戦いが容認された。(111)

Johnson も同じく、「聖戦は、宗教共同体と、それに属さない人々との間で行われる戦争」(45) と定義する。指輪破棄を巡る戦い群は、すべて中つ国の平和という目的に行きつく。否応なしに始められた戦いを含め、一つ一つが渦を巻くように周りを巻き込み拡大し、最終的に中つ国を二分する大きな戦いとなった。アラゴルン率いる「西方世界」はサウロンを頂点とする「暗黒の国」を罰し、滅ぼすことによって、これらの戦いは聖戦の要素を持つようになった。

現代カトリック教会も、アウグスティヌスの『神の国』や、アクィナス『神学大全』などの神学的伝統を踏襲し、正当防衛は重大な義務であるとの立場を以下のように明らかにしている。

正当防衛は単に権利であるばかりではなく、他人の生命に責任を持つ者にとっては重大な義務となります。共通善を防衛するには、不正な侵犯者の有害行為を封じる必要があります。合法的な権威を持つ者には、その責任上、自分の責任下にある市民共同体を侵犯者から守るためには武力さえも行使する権利があります。(日本カトリック司教協議会『カトリック教会のカテキズム』2265 項)

戦争の危険が存在し、しかも十分な力と権限を持つ国際的権力が存在しない間は、平和的解決のあらゆる手段を講じたうえであれば、政府に対して正当防衛を拒否することはできないであろう。国家の元首ならびに国政の責任に参与する者は自分に託された国民の安全を守り、この重大事項を慎重に取り扱う義務がある。(第二バチカン公会議公文書全集『現代世界における教会に関する司牧憲章』79 項)

中世から現代に至るまで、カトリシズムは条件付きで戦争を容認してきた。トールキンの作品中の戦いもカトリシズムの見地からは正義であり義務であると言えるだろう。

3　『星を飲んだかじや』（*Smith of Wootton Major*）

トールキンが『指輪物語』で激しい戦いの場面を多く描き、その多くはカトリシズムの見地から支持されるのではないかと論じてきた。しかしながら、1967 年に発表されたトールキン存命中最後の出版である『星を飲んだかじや』に戦いの場面は全くない。主人公であるかじやは戦わない。

かじやは子どもの頃にお祭りで出されたケーキの中に仕込まれた星を飲み込む。その星は妖精の星だったので、かじやは妖精の国へ出入りすることができ、そこでさまざまなことを体験する。かじやは大人になって、父親である鍛冶屋の跡を継ぐ。結婚して子どもにも恵まれ幸せな家庭を築くが、ある日妖精の王から星を手放し次の世代へ譲り渡すように促される。かじやは切り離される痛みを覚えながらも、公平な視点から血の繋がりのない子どもに譲渡を決める。あらすじを辿っただけでも分かるが、『指輪物語』や『ホビット』のスリルと興奮を期待する読者はことごとく裏切られる。たんたんと物語は進行し、妖精の王ですら、集会所の料理人見習い（のちに料理人）として働いているという地味な設定である。

> He (Smith) remained a learner and explorer, not a warrior; and though in time he could have forged weapons that in his own world have had power enough to become the matter of great tales and be worth a king's ransom, he knew that in Faery they would have been of small account. So among all the things that he made it is not remembered that he ever forged a sword or a spear or an arrow-

head.（20）

「かじやは戦士ではなく、学ぶ者であり、探検する者であり続けた。妖精の国での経験から賢くなったかじやは、たとえ人間の世界でどんなに価値がある武器を鋳ることができるようになっても、妖精の国では意味がないことを知っていた。そして、多くの物を鋳ったが、武器は鋳らなかった」。かじやは戦わないだけではなく、武器すら造らないという徹底した不戦主義者である。

『指輪物語』でも『ホビット』でも、主要登場キャラクターたちは戦ってきた。主要作品では、戦士側に感情移入することがほとんどだったが、『星を飲んだかじや』に出てくる戦士は暗い恐ろしい存在で、誰をも寄せ付けない。『指輪物語』や『ホビット』にも出てきた、「妖精」「戦士」「勝利」「歌」「輝き」などのキーワードが肯定的から否定的へとまさに 180 度の転換をしているのも注目に値する。『星を飲んだかじや』で戦士が登場する場面は以下の、かじやが妖精の国の国境いを歩いていたときに岸辺に出て戦士たちを目撃する箇所だけである。

> ... bearing the white ships that return from battles on the Dark Marches of which men know nothing. He（Smith）saw a great ship cast high upon the land, and the waters fell back in foam without a sound. The elven mariners were tall and terrible; their swords shone and their spears glinted and a piercing light was in their eyes. Suddenly they lifted up their voices in a song of triumph, and his heart was shaken with fear, and he fell upon his face, and they passed over him and went away into the echoing hills.（22）

「人間が知る由もない邪悪な闇から帰還した兵士をのせた白い船が浮かんでいた。妖精の乗組員は皆背が高く、恐ろしげだった。太刀や槍を持ち、眼光には人を突き刺すような鋭さがあった。突然戦士たちは高らかに勝利の歌を

歌い、かじやは恐れて心がふるえ顔を伏せた。一同はかじやのわきを通り抜け、こだまの聞こえる山々の方へと去って行った」。戦いから戻った妖精の戦士たちは恐ろしげな外観で、海は泡が砕け散っても音も立てない。その静寂の中、突然兵士は勝利を歌って、かじやを震えさせる。これは先に挙げたローハンの戦いの場面と比較して大きく異なる。ローハンの兵士たちも、戦いで喜びの歌を歌ったが、それは伝播していく高揚感に満ちていた。一方、妖精の戦士は勝利を歌っているにも関わらず、そこには達成感や満足感は感じられず、喜びもない。『星を飲んだかじや』で、トールキンは戦いを放棄し、戦う意義にすら疑問を抱かせる。

上の引用で、戦いから戻った妖精の描写 “The elven mariners were tall and terrible; their swords shone and their spears glinted and a piercing light was in their eyes.” と対照を成しているのが、妖精の女王の描写である。

> There he（Smith）was brought before the Queen herself. She wore no crown and had no throne. She stood there in her majesty and her glory, and all about her was a host shimmering and glittering like the stars above; but she was taller than the points of their great spears, and upon head there burned a white flame.（31）

妖精の戦士は剣や槍が光り、突き刺すような眼光だったが、女王の方は彼女自身が空の星の如く光輝き、頭上には白い炎が燃えている。兵士は背が高かったが、女王は彼らの槍の穂先よりも背が高い。妖精の女王は「冠も玉座もなく、威厳と栄光の中に立っている」。わざわざ兵士の描写に使った同じ単語や関連する単語 “spear, tall, glinted, light, shimmering, glittering, white flame” などを用いているので、戦うこともなく所有もしない女王を、戦士と比較してトールキンが意図的に優劣をつけているのがわかる。

4　カトリシズムから妖精の愛へ

『指輪物語』から『星を飲んだかじや』の作風の変化には目を見張るものがある。その変化の流れはトールキンの中のカトリシズムが薄れていくのにシンクロしているのではないだろうか。

『星を飲んだかじや』は、ちょうど第二バチカン公会議が終わった後、様々な変更の公布がなされている頃に発刊された。アジョルナメント（現代化）をテーマに行われた第二バチカン公会議では、トールキンの愛するサクラメントが大幅に改正されている（“The Church Since Vatican Ⅱ”）。第二バチカン公会議ではまた、教会の構造、典礼、そして教義に刷新が行われたが、それらは近代化を掲げ、平信徒がサクラメントを容易に理解できるように、そしてミサへの参加が促されることを目的としていた。しかし、トールキンをはじめ、保守的な信者にとって我慢ならない懸案であったことは想像に難くない。

またEncyclopædia Britannicaによると、第二バチカン公会議では、エキュメニズムが提唱された。それは、多様性を認め、その中でより大きな統一を計ろうというコンセプトだった。これに対してもトールキンは憤懣やるかたない（394）。そして悲しい調子で息子に心の内を打ち明ける。

> ‘Trends’ in the Church are .... serious, especially to those accustomed to find in it a solace and a ‘pax’ in times of temporal trouble, and not just another arena of strife and change. But imagine the experience of those born（as I）between the Golden and the Diamond Jubilee of Victoria. Both senses or imaginations of security have been progressively stripped away from us.（*The Letters of J. R. R. Tolkien* 393）

「ヴィクトリア女王在位50年から60年の間に生まれ、カトリックの伝統に安らぎと慰めを感じていた者にとって教会のトレンドは深刻だ。今まで安全

で守られていた感覚が剥がし取られるように感じられる」と書かれた後に“There is nowhere else to go!”と続く。トールキンは心から愛していたサクラメントを、心から信頼していたローマカトリック教会に改められるという大きな矛盾に直面した。ローマカトリック教会はそれまでの主張を変え、トールキンにとってそれは裏切りに等しいことだった。しかし、それでもトールキンはカトリック教会以外他に行く場所はないと、心は葛藤と悲しみに満ちていた。そのトールキンの心情が『星を飲んだかじや』には包含されているのではないか。ローマカトリック教会から心が離れるにつれ、作品からカトリシズム色が消えていくのは自然の流れだろう。

『星を飲んだかじや』は非常にトールキンらしい脇道から生まれた。カーペンターによると、トールキンは、George MacDonald の *The Golden Key* の序文を書くように依頼され、珍しく引き受けた。しかし、マクドナルドの著作の多くはトールキンからすれば、道徳的な寓意性によって損なわれていると思われた。トールキンはそこで、マクドナルドの読者に対して、「妖精」という語の意味を説明することから始め、その説明のための物語が『星を飲んだかじや』だったのだ（244）。トールキンは自ら『星を飲んだかじや』について解説したエッセイの中で、妖精の愛についてこう説明する。

> The love of Faery is the love of love: a relationship towards all things, animate and inanimate, which includes love and respect, and removes or modifies the spirit of possession and domination.（131）

「妖精の愛は、愛の愛であり、それは愛と尊敬で、所有や占有ではない」。トールキンは『星を飲んだかじや』で妖精の愛を説明するために、一番大切なことを改めて考え、それ以外の物を削ぎ落としていった。削ぎ落とされたものには「戦い」が含まれており、それはカトリシズムに裏打ちされた戦いだった。『星を飲んだかじや』のかじやに「君主の権威」はなく、所有や占有にまつわる「正当な原因」も持ち合わせていない。残ったものは「正しい意図」のみである。かじやは、幼い頃、妖精の星を飲み込み、長年それを額につけ、

妖精の星に守られて生きてきた。妖精の星を手放すことを躊躇するかじやに妖精の王が言う。「いつまでも独り占めにしたり、家宝としてしまいこんでおいてはいけないものがあります。そういうものは一時的に貸し与えられたものなのです。あなたは他の人にこの星が必要だとは考えないかもしれないが、しかしそうなのです。もうあなたが星を手放す時が迫っているのですよ」(38)。かじやは「差し貫かれるような痛みを感じ」(41) ながらも、「正しい意図」で、妖精の星を自分の直系にではなく、嫌われ者のノークスの孫に譲渡を決める。このプロットはヨブ記を強く想起させる。「私は裸で母の胎から出てきた。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな（ヨブ記１：21)」。かじやは「これまで妖精の星が自分のところに持ってきてくれたものに感謝していた」(38)。妖精の愛はカトリシズムに捉われない。ただ主に感謝し、聖書に依拠する。それがトールキンが人生の最晩年に行き着いた「妖精の愛は、愛の愛であり、それは愛と尊厳」なのかもしれない。

おわりに

トールキンは、作品中に多くの戦いを描いてきた。彼の主要作品、『ホビット』や『指輪物語』は、それ故にスリルや興奮が増し加えられ、読者を魅了してきた。ところが、トールキン最晩年の作品『星をのんだかじや』には、そのトールキンらしい戦いの場面が出てこない。それどころか、戦いを完全否定するかじやが主人公である。戦いが作品から消し去られた理由をトールキンの宗教心の揺らぎに焦点を当て考察を試みた。まず、『指輪物語』で描かれる戦いが、アウグスティヌス、アクィナスらが定義した「just war（正戦)」の条件、すなわち「君主の権威」「正当な原因」「正しい意図」を満たしていることを検証した。そして、『指輪物語』の戦い群全体を俯瞰すれば、宗教戦争とも言われる「holy war（聖戦)」の条件を併せ持つようになる。トールキンの描く戦いはカトリシズムの見地から見ると義務であり正義であっ

た。しかしながら、トールキンは晩年、変革を重ねるローマカトリック教会に強い失望を感じていた。トールキンは妖精を説明するための物語、『星をのんだかじや』で、カトリシズムに縛られた義務や正義を手放し、戦いを放棄した。トールキンはカトリシズムから、妖精の愛と言うべき境地に到達したのかもしれない。

注

1　登場人物が人以外（例えば、Hobbit、Wizard、Elf など）の場合は、本論では登場「キャラクター」で代替することとする。

参考文献

Carpenter, Humphrey. *J. R. R. Tolkien: A Biography*. HarperCollins Publishers, 2011.; カーペンター , ハンフリー.『J. R. R. トールキン　或る伝記』菅原啓州訳 , 評論社 , 1982.

Johnson, James Turner. *The Holy War Idea in Western and Islamic Traditions*. Pennsylvania State University Press, 1997.

Tolkien, J. R. R. *The Hobbit*. A Del Rey Book, 1996.; トールキン , J. R. R.『ホビット』山本史郎訳 , 原書房 , 2012.

———. *The Letters of J. R. R. Tolkien*. Edited by Humphrey Carpenter and Christopher, HarperCollins Publishers, 1981.

———. *The Lord of the Rings*. HarperCollins Publishers, 2005. ; トールキン , J. R. R.『指輪物語』瀬田貞二・田中明子訳 , 評論社 , 1995.

———. *The Silmarillion*. Edited by Christopher Tolkien, A Del Rey Book, 1977.

———. *Smith of Wootton Major*. Edited by Verlyn Flieger, HarperCollins Publishers, 2005.

“The Church Since Vatican Ⅱ.” *Britannica*, 2020 Encyclopædia Britannica, Inc. https://www.britannica.com/topic/Roman-Catholicism/The-church-since-Vatican-II.

Wood, Ralph C. *The Gospel According to Tolkien*. Westminster John Knox Press, 2003.; ウッド , C. ラルフ.『トールキンによる福音書』竹野一雄訳 , 日本キリスト教団出版社 , 2006.

アウグスティヌス.『神の国（五）』服部英次郎訳 , 岩波文庫 , 1983.

アクィナス , トマス.『神学大全』大鹿一正訳 , 創文社 , 1997.

石川明人.「キリスト教と戦争」中公新書 , 2016.
木村正俊.「正戦と聖戦」『戦争批判の公共哲学』小林正弥編 , 勁草書房 , 2003.
『聖書　新改訳』日本聖書刊行会 , 1973.
南山大学監修.『第二バチカン公会議公文書全集』中央出版社 , 1992.
日本カトリック司教協議会教理委員会.『カトリック教会のカテキズム』日本カトリック司教協議会教理委員会訳 , カトリック中央協議会 , 2002.